



20th CENTURY



20世紀の文学

世界文学全集

2

D・H・ロレンス

チャタレイ夫人の恋人

てんとう虫

イタリアの薄明

詩

集英社

世界文学全集

2

D・H・ロレンス

昭和四十年二月二十八日 印刷

昭和四十年三月二十八日 発行

訳者 伊藤整・菊池武一・西脇順三郎

発行者 陶山 巖

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 文勇堂製本工業株式会社

本文用紙 日本バルプ工業株式会社

表紙 東洋クロス株式会社

発行所 株式会社集英社

東京都千代田区神田一ツ橋二ノ三

電話(262)三三〇一(代表)

振替 東京一五六五三

定価 五二〇円(落丁・乱丁は本社でお取りかえいたします)

© 1965 Shueisha



目 次

チャタレイ夫人の恋人

伊藤 整 訳 三

『チャタレイ夫人の恋人』の性描写の特質

伊藤 整 二九六

『チャタレイ夫人の恋人』あとがき

伊藤 整 三二

てんとう虫

菊池武一 訳 三五

イタリアの薄明

西脇順三郎 訳 三九

詩 篇

西脇順三郎 訳 四四

ロレンスの思想と文学

西脇順三郎 訳 四七

——その幾つかの源泉について——

チャタレイ夫人の恋人

第一章

現代は本質的に悲劇の時代である。だからこそわれわれは、この時代を悲劇的なものとして受け入れたがらないのである。大災害はすでに襲来した。われわれは廢墟の真只中にあって、新しいさやかな棲息地を作り、新しいさやかな希望を抱こうとしている。それはかなり困難な仕事である。未来に向かって進むならかな道は一つもない。しかしわれわれは、速まわりをしたり、障礙物を越えて這いあがつたりする。いかなる災害がふりかかろうともわれわれは生きなければならぬのだ。

これがだいたいにおいてコンスタンス・チャタレイの境遇であつた。ヨーロッパ大戦は、彼女の頭上にあつた屋根を崩壊させてしまつたのだ。その結果として彼女は、人間には生きて識らなければならぬものがあることを悟つたのである。

一九一七年に彼女はクリフォード・チャタレイと結婚した。

それは、彼が休暇を得て、一ヵ月故国に帰つていたときのことであつた。彼らは一ヵ月の蜜月を送つた。それからクリフォードはフランダーズ（ウエスト・フランダーズ。第一次大戦中）へもどつていった。だがそれから六ヵ月後に、彼ははずたずたに負傷して英國へ送りかえされた。妻のコンスタンスはそのとき二十三歳で、彼は二十九歳であつた。

彼の生への粘着力は驚くべきものであつた。彼は死ななかつた。ひどい負傷もどうにか癒着しうになつた。二年の間医師の手にゆだねられていたのち、彼は治癒の宣言を受けた。そして、再び彼は人生へもどることができたのだが、彼の腰から下の半身は永久に麻痺したままであつた。

それはちょうど一九二〇年のことであつた。クリフォードとコンスタンスは、クリフォードの故郷、家族の居所なるラグビー邸にもどつた。彼の父はその前に死んでいたので、クリフォードは現在では従男爵、クリフォード卿であり、コンスタンスはチャタレイ令夫人であつた。ふたりはかなり不足がちな収入によって世離れたチャタレイ家の世帯をきり盛りし、そのラグビー邸で結婚生活を始めるためにやつてきた。クリフォードにはひとりの姉があつたが、彼女はもうずっと前に家を出ていた。ほかには近い親戚はなかつた。彼の兄は戦争で死んだのであつた。クリフォードは永久に脚部の自由を失い、もう絶対に子供を持つことはできないのを知りつつも、彼の力の及ぶかぎりチャタレイの名を絶やさぬようにするために、煤煙に閉ざされた中部地方へ歸つてきたのである。

實際は彼はあまり絶望してはいなかつた。彼は車輪のついた椅子にすわつてひとりで乗りまわすことができた。それから、小さいモーターを取りつけた覽車式の椅子もあって、それで前庭を乗りまわしたり、邸の寂しいりっぱな庭園の中をゆっくり乗りまわしたりした。彼はこの庭園を内心ではひじ

ように誇りにしていたのであったが、口先では無関心なようすで扱っていた。

彼は、ひじょうに苦しい目に逢ってきたために、苦痛に対する感受力がある程度までなくなっていた。彼は不思議なほどいきいきとして快活であり、血色のいい健康そうな顔と、挑むような青い輝いた眼をしていて、ほとんど活発であるといつてもいいほどであった。彼の肩は広く強靱で、両手は逞しかった。彼は贅沢な服装をし、ボンド・ストリートできの美しいネクタイをしていた。しかもなお彼の顔には、盗み見するようなまなざしと、足の不自由な人間の持っている軽い空虚な感じが隠しきれなかった。

彼はもうすこしで生命を失うところだったのだ。その結果、残っているものが、彼には限りなく貴重なのであった。

あれほどの打撃を受けてもなお生きていることを、いかに誇っているかは、彼のいらだたしげな眼の輝きに明らかであった。しかしそのひどい打撃のために、彼の内部にあったものが亡びていた。彼の感情のあるものは失われてしまったのだ。無気力の空虚さともいべきものがそこにあった。

彼の妻のコンスタンスは、柔らかい褐色の髪と、しっかりとした身体を持った、血色のいい、田舎ふうの感じの女であった。動作はもの静かであったが、精力に満ちているように見えた。彼女は、ものをいぶかるような大きな眼をしていた。声は柔らかなめらかであり、ちょうど生まれ故郷の田

舎から出てきたばかりのように見えた。しかし実際はそうではないのであった。彼女の父は王立美術院会員で、一時はひじょうに有名であった老マルカム・リイド卿であった。彼女の母はかつての盛大な、かなりにラファエル前派的だった時代のフエビアン協会（一八八四年英国に創立された著名な学者を含む漸進的社会主義者の団体）の教養のある会員のひとりであった。コンスタンスと姉のヒルダとは、芸術家と教養ある社会主義者との父母の間で、いわゆる美学的に反伝統的な訓育を受けた。姉妹はバリやフロレンスやローマへつれて行かれ、そこで芸術の雰囲気を吸った。ふたりはまたそれとは別な場所へも連れて行かれた。ヘーグやベルリンへ行つて、演説するひとびとがどんな文化的な言辞を弄してもひるむ気配のない聴衆の集まった大きな社会主義者の集会にも出た。

それゆえふたりの娘は、小さいときから、芸術とか理想的政治などというものにはびくともしくなっていた。そういうものは彼女らにとっては自然な雰囲気にすぎなかった。彼女らは世界主義者であると同時に地方主義者であった。そして純粹の社会的理想と調和するような芸術上の世界的地方主義というようなものを抱いていた。

彼女らは十五歳ころにドレスデンへやられて、さまざまなもの、なかんずく音楽を習った。そこで彼女らは愉快に暮らした。ふたりは学生たちの間で自由な生活をし、男たちと哲学や社会学や芸術上の問題を論じあった。ふたりは男たちと

まったく対等にやってのけた。女であるということは、かえって有利であった。ふたりは頑丈な青年たちとギターを鳴らしながら森の中を歩きまわった。ワンダーフォーゲルの歌をうたった。まったく自由であった。自由！それはまことに偉大な言葉であった。広々とした野外に出て、朝の森に行き、すばらしい喉を持った若い男たちといっしょにいて、思うままにふるまえる自由——中でも——自分の好きなことをいえるという自由。もっとも重大なことは、しゃべりちらすということ、感激したおしゃべりの交換ということであった。恋愛は単に二の次のものにすぎなかった。

ヒルダもコンスタンスも十八になるともう試験的な恋愛の経験を持っていた。彼女らと情熱的な話をしあい、元気に歌を歌い、そのうえになんの気兼ねもなく樹の下でいっしょにキャンプもした青年たちは、当然のことだが、恋愛関係を求めた。娘たちは思いどつていたのであったが、しかし恋愛については幾度も話しあったことだし、恋愛は何よりもたいせつなことでとされてきた。男たちはひじょうにしたてに出て、それを熱望した。娘が女王のようにふるまって自ら賜物（たまもの）を与えることがどうして悪いことだったろう？

こうして姉妹は、自分をもっとも微妙なうちあげた議論をしあった青年たちへ、おのおの彼女らの賜物を与えたのであった。議論や論争というもののほうが偉大なものであった。恋愛や身体（からだ）の交渉は、ただ単に原始への復帰にすぎず、恍惚（きょうご）

感を低めるものにすぎなかった。そのことがあって以後相手の男に抱いていた彼女らの愛情は薄くなった。そして男が、自分の秘密や内的自由のなかに侵入してでもきたように、男を憎む気分になっていた。というわけは、少女としては、絶対的な、完全にして純粹な高貴な成就（じゆうきゆう）ということに、個人の權威と人生における意味の全部があると考えるのも当然だったのである。少女にとって人生はその他の何を意味していたろう？ 古臭い下等な関係や隷屬状態（れいぞくじょうたい）をふり落とすことのはかに。

どのように感傷化しようとも、このような恋の交渉は、太古からある下等な関係とか隷屬とかいうことの一つなのだ。恋のほめ歌を作った詩人たちの大部分は男であつたのだ。女性には常に、恋よりもっと善いなにか、もっと高貴ななにかが存在していることを知っていたのだ。しかも現代の女性は、いっそう決定的にそのことを知っている。女性の美しい純粹な自由（じゆう）というものは、どんな性的な恋愛よりもさらに無限に驚嘆すべきものだ。唯一の不幸な点は、男性がこの問題では女性よりはるかにあとに遅れてぐずぐずと歩いていることである。男性が犬のようにセックスにだけ熱中していることである。

だから女は讓歩（じやうぽ）しなければならなかったのだ。男というものは、欲望を持った子供のようなものなのだ。女は男の欲望に譲らねばならなかったのだ。でなければ男は手におえなく

なり、がまんならぬことを始め、いままでの楽しい交渉をめちゃくちゃにしてしまう。ただ女というものは、自分の内部にある自由な個我を失うことなしに男に譲歩することができないのだ。セックスについて歌ったり書いたりした連中は、このことをじゅうぶんに考慮に入れていなかったのだ。女は、ほんとうは自分を譲ることなしに男を受け入れることができるものだ。まことに女は、自分を男の力に支配されることにしに男を受け入れるのだ。むしろ女は男を支配するためにセックスを利用することができるのだ。というのは、セックスの交わりにおいて、女は控え目にしていて、自分が悦びに達せずに、男だけが終わらせ消耗させればいいのだ。そしてそののちも、女はその結合を持続して男をただの道具にしており、自分の興奮と悦びを作り出すこともできるのだ。

戦争が始まるまでにはこの姉妹はどちらも恋愛を経験していた。戦争になって、ふたりは急いで帰国した。ふたりとも言葉のうえでの接近、つまりお互いに話しあうことに深い興味を感じていなかったならば、男と恋愛に陥ることがなかったであろう。ほんとうに頭のいい青年と幾月もの間、毎日のように熱情的に何時間も話し合うということには、驚くべき、深刻な、信じることもできないような喜びがあった……それは彼女らが実際それに直面してみるまではわからずにいたことだった！《汝に語りあう男性を与えん！》という天国の約束のような言葉は一度も聞いたことはなかった。その

約束がどういうものであるかに彼女らが気がつく以前に、それは実行されてしまったのである。

だから、これらのいきいきした、魂を明るくするような議論のために生まれた親密さの続きとして、身体のうちでの交渉が避けられないというならば、それは仕方のないことだ。それは一つの章の終わりのようなものであった。肉体の交わりにはそれ特有の喜びがあった。それは自己の存在を確認する最後の痙攣（けいれん）、肉体の内部に奇妙にひろがってゆく戦慄（せんりつ）な喜びであった。それは一つの文章の結末を示す最後の言葉のような、主題の切れ目を示すために挿入される星印の列の与えるような刺激的なものであった。

一九一三年の夏休みに彼女らが帰国したときには、ヒルダは二十歳でコニー（コンス）は十八歳であった。父親は、ふたりがともに恋愛の経験を持っていることを明らかに見てとった。

だれかがいったとおり *L'amour avait passé par là*（恋はそこを訪れた）だった。だが彼自身そういう経験を持っていた人間であったので、彼は娘らの生活を拘束しなかった。母親はそのとき、死ぬ数ヵ月前の神経的な病人であったが、ただ彼女の娘らが《自由》であり、《自分の生活を充実させる》ことのみを望んでいた。彼女は自分というものをしっかり掴んだことがなかった。彼女にはそれが許されなかったのだ。その理由がどこにあったかは不可解である。というのは、彼女は自分だけの財産も持っていたし、自分だけで生きる途（みち）もあつ

たのだから。彼女は夫を悪くいつていた。だが彼女が押し除けることができなくて困っていたのは、実は彼女の精神に加えられていたある種の古い權威の印象であつたのだ。マルカム卿は、この神経質な、敵意に満ちた癪癖かんぺきの強い妻を、好きなことをするように放つておいて、自分だけの道を歩いていたのだから、それにはなんの關係もないのであつた。

そういうわけで娘らは《自由》であつた。ふたりはドレスデンに、音楽に、大学に、青年らにまたもどつていった。彼女らはおのおの自分の青年を愛していた。そして青年のほうもまた精神的な、魅惑的な熱情で彼女らを愛した。一般の青年が考えたり言ったり書いたりするすばらしいことを、彼らも娘らのために考えてやったり、話してやったり、書いてやったりした。コニイのほうの青年は音楽をやり、ヒルダのほうの工業を学んでいた。だが彼らは、自分の少女らのためにのみ生きていた。彼らの精神において、その心の興奮においては、という意味では。ほかのことでは、彼らは自分では気がつかぬながら、少女らからすこし除け者にされてゐた。

この青年たちにおいても、恋愛、すなわち肉体の上の経験が跡を残したことは明白であつた。恋愛というものが、男女の身体に印おしすところの、微妙な、それでいてまちがいのない変化は不思議なものである。女は花が開いたように、微妙な丸味を帯び、その幼い角かどばつたところは柔らげられ、そ

の表情は不安にもなり、また勝ちほこつたものにもなる。男の変化はもっと静かで、もっと内面的であつて、肩と尻の輪郭が目立たなくなり、確信的なものが減り、ためらいがちになつてくる。

身体内部に起こる性の現実の快感においては、彼女らは男性のふしぎな力にほとんど圧倒された。だが彼女らは、たちまち自分をとりもどし、性の快感は感覚にすぎないと考えて、その自由を失うことはなかつた。だが男のほうは、性の経験についての感謝の念から、自分の魂を女へ捧げるのであつた。そしてその後では、何か損な取り引きをしたような顔をするのだつた。事後にはコニイの恋人はすこし不機嫌になり、ヒルダの恋人は嘲弄ちょうろう的になつた。だがそれが男というものなのだ！ 恩知らずで、満足するということがない。彼女を受け入れないと、受け入れないということでも女を嫌うのだ。そして彼女らを受け入れてもまた、何かほかの理由で女を嫌うのである。言いかえれば、女のほうでどういうことをしてやっても、彼らはいつまでも満足することを知らぬ子供にすぎない。彼らは何を手に入れても満足しない子供だ、ということのほかにはまったく理由というべきものはないのである。

だが、いよいよ戦争になつた。ヒルダとコニイは、五月に母の葬式に帰国したばかりではあつたが、また急いで国へ歸つた。一九一四年のクリスマススの前に、彼女らのこのドイツ

の青年はふたりとも戦死した。姉妹はそのことで泣き、青年への情熱的な愛着を感じた。だが心のなかではしだいに彼らのことを忘れていった。もはや彼らはこの世にいない人間だったのだ。

姉妹は、元来は母のものであったケンジングトンの父の家に住んでいて、ケンブリッジの青年のグループと往き来していた。そのグループは《自由》を装い、フランネルのズボンと胸の開いたシャツを身につけ、育ちのいい情熱的な奔放性と、囁くような甘える声と、敏感すぎるほどの作法とを持っている連中であつた。ヒルダは突然、そのケンブリッジのグループでも年長者の、彼女より十歳上の男と結婚した。その男は金も相当に持っていたし、かなり実入りのある政府の仕事も引き受けており、また哲学の論文も書くというふうな人間であつた。彼女はその男とウェストミンスターのごちんまりした家に住み、政府に関係のある連中の立派な交際社会に出入りしていた。その交際社会の連中というのは、第一流とはいえなかったが、イギリス人の中での真の知識階級であり、またはそうなるべき人たちで、自分の口にすることをよくわきまえているか、あるいはわきまえているような話しかたをする連中であつた。

コニイは戦時の楽な仕事をしながら、あらゆることを上品に嘲笑するようなケンブリッジのフランネルのズボンをはいた非妥協派の連中と交際していた。彼女の《友だち》は、そ

れまで炭坑の特殊技術を研究していたボン大学から急いで帰国してきた、二十二歳の青年なるクリフォード・チャタレイであつた。彼はボンへ行く以前にケンブリッジに二年在学していたのだった。いまでは彼は、ある目立つた連隊の中尉になっていた。その結果彼は、軍服を着ているためにあらゆることをもっと巧妙に擲擲することができるようになった。

クリフォード・チャタレイはコニイよりも上流の階級に属していた。コニイのほうは暮らしの楽なインテリゲンチアであつたが、彼は貴族だつた。名門というほどではないにしても、とにかく貴族だつた。彼の父は従男爵であつたし、母は子爵の娘であつた。

だが、クリフォードは、コニイより育ちもいいし、《交際社会》の人間ではあつたが、彼自身は奇妙に彼女よりも田舎ふうでありもっと憶病であつた。彼は偏狭な《上流社会》、つまり地主の貴族階級の中にいるときは楽にしていられるのだが、一度多数の中流下流階級の人間や外国人の間に入ると、たちまち内気な人間になってしまうのだった。もっと正確にいうならば、中流や下流社会の人間や、自分と階級のちがう外国人の間に入ると、彼はすこしばかり怖くなるのだった。特権階級のあらゆる庇護の下にあつた彼が、自分自身の頼りなさに気がつく、麻痺するような気持ちになるのだ。妙な話だが、まさに現代の現象なのである。

それだからコンスタンス・リイドのような少女の、不思議

な静かな確信が彼を魅惑することになったのだ。この外部の世界の混沌のなかにあつては、彼よりも彼女のほうが自己を把握する力を持っていた。

それにもかかわらず彼もまた反逆者であつた。彼は自分の階級にすら反抗していたのである。反逆といつてはあまり意味が強すぎるだろう。とてもそんな強いものではなかった。彼はただ、伝統やほんとうの権威というものに反対するところの青年の一般的な習慣に陥っていたのであつた。父親というものはみな滑稽に思われた。彼自身の頑固な父親はとくにそうだった。政府というものも滑稽だった。当時の英国の《身て而して見よ》式のやつがとくにそうだった。軍隊というものも滑稽だった。頑迷な將軍らがそうであり、とくに赤ら顔のキッチナア將軍がそうだった。戦争ですら滑稽なものに思われた。戦争は多数の人間を殺すものであつたけれども。

まったくあらゆるものが、すこしずつまたはひどく滑稽だった。権威とつながりのあるものはすべて、軍隊でも、政府でも、大学でも、ある程度まではみな滑稽であつた。そして支配するようなふりをしている限りにおいては、支配階級というものが滑稽だった。クリフォードの父のジョフリー卿は、自分の森林を切り倒したり、自分の炭坑から男たちを引きぬいて戦地に送ったりして、自分は安全な愛国主義者になつてゐた。それでいて自分の収入以上の金を国家に注ぎこんでい

るのだった。彼には、それがまたひどく滑稽なことだった。

ミス・チャタレイ——エマ(クリフォードの姉)——は、傷病兵看護の仕事をするために中部地方からロンドンに出てきたときに、ジョフリー卿の熱烈な愛国主義のことを、ものやわからかに、それでいて実におもしろく話をしてくれた。それを聞いたとき、長兄で跡継ぎであるハーバートは、塹壕用に切り倒されるその樹木というのが彼のものであつたが、思わず笑ひだしてしまつた。だがクリフォードは、すこし不安そうな顔をしてほえんだだけであつた。あらゆるものが滑稽であるといふことは事実だった。だが、それがもつと身近のことになつてくると、自分自身が滑稽になつてしまふではないか……? すくなくとも彼とちがつた階級の人間、たとえばコニイなどは何事かに熱中しているのだった。あの連中は何かを信じているのだ。

英国兵士のことや徴兵制の恐怖や砂糖や子供の糖菓の不足のことについては、その人たちは熱心なのだつた。もちろんそれらのことに關しての当局の処置は滑稽なほどまちがつてゐた。だがクリフォードにとっては、それが心を動かすことではなかった。彼にとつては当局というものは *the boss* (最初から)滑稽なものだったのだ。糖菓や兵士のことには無関係であつた。

そしてまた、当局者たち自身も滑稽には感じてゐたし、滑稽なやり方もしてゐた。その当座はただもうばか騒ぎだった

のである。やがて事態は進展してゆき、ロイド・ジョージが時局收拾に乗り出してきた。こうなってきたてはもう、滑稽などというところではなかった。浅はかな青年たちももう笑ったりしなくなった。

一九一六年にハーバート・チャタレイが戦死した。それでクリフォードが跡継ぎということになった。彼はこのことにすら恐怖を感じた。ジョフリイ卿の子息にしてラグビー邸の跡継ぎという自分の存在の重大な意味が彼の中にしみ込み、彼はもはやそれからのがれられないのだ。しかもなお、このことすら、沸きだっている広大な世界から見れば、滑稽なことであるのを彼は知っていた。いまや彼は、跡継ぎとしてラグビー邸に責任を持つに至った。それは怖ろしいことではないか？　そしてまた同時にすばらしいことでもあり、たぶん途方もないことではなかったらうか？

ジョフリイ卿はばかばかしいことを考えるような人でなかった。彼は蒼白く緊張し、自分の考えに閉じこもり、母国と自分の立場とを救うという、動かしがたい決意をしていた。

当事者がロイド・ジョージであらうがだれであらうが、彼には変わりないのだった。彼はまったく孤独に陥り、具体的英国の姿から自分を切り離し、まったく批判力を失って、ホレイショ・ボトムリイ（英国の政治家、政論家。一九〇六年以来英国下院議員たり）をりっぱだと思ったりしていた。ジョフリイ卿が英国とロイド・ジョージを支持する態度は、彼の祖先が英国と聖ジョージ（英国の守護聖徒）

（三〇三年キリスト）を支持していたのと同様であり、彼にはその教に殉じて死す）の区別があるなどとは思われなかった。それでジョフリイ卿は材木を切り出し、ロイド・ジョージ即英国、英国即ロイド、ジョージを支持していた。

彼はまたクリフォードが結婚して跡継ぎを生むことを望んでいた。父親は救いたいアナクロニズムであるクリフォードは思っていた。だが彼自身は、あらゆることを滑稽だと考えて尻込みしていること以外に、多少でも父親より進歩していたであらうか？　なぜならば、彼はすこしのまじめさもなく、はなはだ煮えきらないさまで、爵位とラグビー邸とを引き継いだのであったから。

戦争のはなばなしい感激はやがて去った……消えてしまった。あまりに多くの死と恐怖があった。男は自分を支えるものと慰安とが必要になった。男は安全な世界に錨をおろすことが必要になった。男は妻を欲した。

チャタレイ家のふたりの息子とひとりの娘とは、いろいろな人と繋がりがあるにもかかわらずラグビー邸の中でおたがい閉じこもり、妙に孤立した生活をしていた。この孤立の感、領地と爵位があるにもかかわらず、あるいはあるがためにかえって彼らの立場が弱いという感じ、無防禦だという感じが、家族の繋がりを強める役をしていた。彼らは、その生活を送ってきた中部地方の工業家たちからも離れて暮らしていた。また彼らは父ジョフリイ卿の憂鬱な頑迷な孤独な

氣質に従って、彼らの階級からも切り離されていた。この父を彼らは滑稽視していたものの、やっぱり父のことではひどく気をつかっていたのだった。

姉弟三人は、いつまでもいっしょに暮らしてゆこうと言いあっていたのだった。だがハーバートの死んだいまとなつては、ジョフリイ卿はクリフォードが結婚することを望んでいたのである。ジョフリイ卿は、そのことをはっきりと口にしたわけではなかった。彼はあまりものをいわぬ人であった。だが彼がじつと考え深そうにそれに固執していることに對しては、クリフォードは反抗する力がなかった。

だがエマはそれに反對であつた。彼女はクリフォードより十歳年長であつた。彼の結婚は三人の姉弟の間の約束を破棄し、それを裏切ることだ、というのが彼女の意見であつた。

にもかかわらずクリフォードはコニイと結婚して一カ月の新婚旅行に出たのだ。それはあの危機の迫つた一九一七年のことであつた。夫婦はあたかも沈没する舟に残つたふたりの人間のようにすがりあつていた。結婚したとき、彼はまだ童貞であつたので、セックスのことは彼にとつて大きな意味はなかった。ふたりは、そのことを別にして、ひどく仲がよかった。コニイは、セックスの關係以上のものであり、男の《満足》以上のものであるこの仲のよさに、かなり感動していた。とにかくクリフォードは一般の男性よりも《満足》を求め度合いがすくなかつた。いな、仲のよさということとは、そ

のことよりもっと身にこたえる、もっと深いものであつたのだ。そしてセックスというものは、單なる偶然のものか付屬的なものであり、退化した妙に陳腐な一つの器官にすぎないくせに、まだ肉体にしがみついてわれわれを困らせているもので、ほんとうは不要なものと思われた。ただコニイは、義姉のエマに対して自分の立場を固めるためにではあつたが、子供をほしがっていた。

しかし一九一八年の初めに、クリフォードは重傷を負つて送還されてきた。しかもまだ子供は生まれていなかった。ジョフリイ卿は心を傷めて死んだのである。

第二章

コニイとクリフォードがラグビー邸へもどつてきたのは、一九二〇年の秋であつた。弟の背信にまだ腹をたてていたエマは、その前にロンドンに出て、小さなアパートメントを借りて住んでいた。

ラグビー邸というのは、十八世紀の中ごろに初めて建てられた褐色の石造で、細長い、低い古風な家であつたが、そのち次々と建て増されて、べつに特徴というものもない大きな家屋になつたものである。それは櫛かみの木の多い、かなり美しい古風な庭園の中の丘の上に建っていた。だが悲しいかな、そこからは遠からぬあたりに、テヴァーシャル炭坑の

煙突の蒸氣や煙ののぼるのが見えるのであった。そしてまた、湿った霧のかかっている遠くの丘には、テヴァーシャル村の粗雑に乱れた家並みが見えた。その村はほとんど庭園の門のところからすぐ始まって、細長くたどしく一マイルばかりの間、ひどく惨めな醜惡な姿をさらしていた。家屋、黒いスレート屋根で蓋をしたような、思い思いのぎざぎざな空しい佗びしきを見せて、よぼよぼになった小さな埃まみれの煉瓦建ての家屋の列がそこにあった。

コニイはケンジングトン公園とか、スコットランドの山とか、サセックスの丘陵などを見慣れていた。それが彼女に与つての英国というものであった。若い女のストイックな気持ちで、この石炭と鉄の中部地方のまったく魂のないような醜い風物を、彼女はちらつと眺めたきり、氣にかけなかった。それは信じられないほどのものであり、また考えてならないものであった。ラグビー邸のひどく陰気な室で、彼女は炭坑の箭機のかたかた鳴る音、巻き揚げ機の水蒸氣を吐く音、入れ換えをするトロッコの音、運搬機関車の小さな汽笛などを聞いていた。テヴァーシャルの坑岸は数年以前から燃えていた。それを消すのは幾千ポンドもかかることだった。それで燃えるがままにされていた。風はたびたび邸のほうへ吹いたが、そのたびに、家の中は、硫黄を含んだ地球の排泄物が燃焼する臭氣に満たされるのだった。だが風のない日も、常に空氣のなかにはなにか鉅物性の臭氣が混じっていた。それは

硫黄とか鉄とか石炭とか酸などである。そしてクリスマス蕎麥の上にすら、裁きの空から降る黒い神与の食物のように、ひっきりなしに信じられないほど煤が降ってきた。

およそこんなふうには、ここはここなりにいやなことにつきまとわれていた！ それもかなりひどいものであったが、抵抗したとてどうなるものか？ それをなくするのは不可能なことだった。それは続いてゆくだけのことだ。どこだって生活というものは同じことだ！ 夜は、低い天井のように垂れた雲の表に、震える赤い色が、斑点になったり拡がったり縮まつたりしながら、痛む火傷のように焰が映っていた。それは熔鉍炉の火であった。初めそれは一種の恐怖感覚でコニイを魅惑した。彼女は地獄に住んでいるような氣がした。やがてそれにも彼女は慣れてきた。そして朝になるとよく雨が降るのであった。

クリフォードは、ロンドンよりもラグビー邸のほうが氣に入ると自分でいっていた。この地方には特殊の暗鬱な意志のようなものがあって、人間はひどく貪食であった。だがその他に、この地方の人間にはどんな特色があるだろう、とコニイは考えた。その人々には眼も精神もないようであった。人はこの地方の風物と同じように顔色憔悴し、不格好で、佗びしく、それに無愛想であった。だが、あいまいに口の奥で発音する彼らの方言と、仕事の帰りに、アスファルトの道の上を群れをなして通るときに鉈を打った炭坑靴を曳きずる音